

Puppetry  
Play Back 2017

人形劇団むすび座『チト』  
50周年記念公演

# 人形劇の2017年回顧

いい人形劇には必ず驚きがある。モノである人形が「生きる」からだ。それは人形劇がイリュージョンと直結する表現であることを示している。しかもその手法は一律ではない。文案の精緻な手法がある一方、布一枚、紙に描いた絵一つでも「生きる」ことがある。2017年も、そうした多様な手法と表現による、いくつかの人形劇に驚かされた。

まずは、人形劇団むすび座が創立50周年記念公演として上演した『チト』（作:M・ドリュオン、脚色:篠原久美子、演出:福永朝子/8月）が素晴らしい。どこにでも花を咲かせることができる不思議な指を持つ少年が、その力で戦争を止めるという話。そのいかにもいい話で終わらず、「さまざまな力で命の花が咲く」というメッセージを語った脚本も良かったが、演出の力がその世界をさらに豊かにしたように思う。そしてそれは一つの手法に縛られない豊かさでもあった。

人形一つとっても、二人遣い三人遣いで操るのもあれば、役者と一体になったものや、大勢の登場人物を絵看板風に描いたものもある。そのバラエティに富んだ自由さには驚いた。そして、少年があちらこちらに花を咲かせるマジックあり、監獄や兵器工場のシーンは斬新な映像と美術による硬質なイメージありと、視覚的な仕掛けもさまざま。さらに四人のバンドの歌と生演奏で、ミュージカルの楽しさも加わる。つまりは総合芸術として、さまざまな力を存分に結集してつくり上げたのだ。それでいて散漫にならず、作品世界にしっかり収斂する統一感があった。まさに「たくさんの力によって花咲いた舞台」だったのである。そして最後に、子供たちの描いた花の映像を劇場の壁と天井一面に広げたとき、その心を観客の胸一杯に伝えて感動的だった。

一方、オランダからやってきたスタッフドパペットシアターの『マチルダ』（作・演出・美術:N・トランター/7月）は、対照的に超ミニマムな人形劇だった。なにしろ、トランターがたった一人できり上げる人形劇である。もう一人のスタッフが役を演じたり、装置を動かしたりす

るが、基本的にはトランターが何体もの人形を操り語り、物語を繰り広げるのだ。金儲けのため、老人たちを閉じ込めて管理する老人ホームの話で、戦争に行ったまま戻らない恋人との妄想に生きる102歳のマチルダをはじめ、さまざまな老人の姿が描かれる。二人や集団の会話のシーンでは、一体の人形だけを動かし他の人形は静止したままにかかわらず、巧みなセリフ術でいきいきとした会話のさまをつくり出す。デフォルメされた人形が、リアルな人間を思わせる。まさにイリュージョンのマジックだ。

そしてこの舞台は、『チト』と同じように、生きていく上で支え合うことの切実さを語る舞台でもあった。老人たちはだれもが人形やペットを抱え、愛し、それへの依存によって老いの日々を支えている。しかしそれらは心の支えであっても、生活にはさらに実質的な支えも必要だ。このホームにはそれが無い。一方人形はトランターによって命を吹き込まれるが、彼もまたそれによって表現の喜びを受け取っている。人形と人形遣いは共存なのだ。このことが、老人に差しのばされるべきもう一つの愛の手を思わせる。つまりこの舞台は、命を育む支え合いの姿を、人形劇の構造を通してクリアに伝えた。

また、日本の古典的な人形劇のスタイルに挑戦したユニークな舞台もあった。「小町曼茶羅」（作・演出:木村繁/10月）。絶世の美女とされ、数奇な生涯と無残な晩年を伝える小野小町の、さまざまな伝説と和歌を構成した新作で、それを常磐津の弾き語りて上演したのだ。近松門左衛門と組んで人形芝居をつくられた竹本義太夫が、新しい節付けをし、人気を博したのが今の義太夫の始まりとされる。常磐津はその後に生まれたさらに新しい浄瑠璃で、江戸時代にはそれによる人形劇もあっただろう。常磐津綱鷲という魅力的な語り手を得たことで、その手法への挑戦を促したようだ。確かに綱鷲は三味線を弾きつつ、2時間をつややかに語りきってみごとだった。そして、小町の物語も、人形を遣ってのパフォーマンスも良く出来ていた。にもかかわらず、人形劇全体の成果としては、もう一つまとまりに欠けたように思う。常磐津の語りや現代語のせりふ、パフォーマンスが絡み合って、力強い物語へと収斂していかなかったように思えた。さらに練り上げて、常磐津という強力なアイテムをより効果的に生かす方法を探って欲しい。

安住恭子(演劇評論家・演劇プロデューサー)

愛知人形劇センターPresents  
『小町曼茶羅』



Stuffed Puppet Theatre  
『マチルダ Mathilde』

P新人賞  
2016受賞  
記念公演

影の色彩ワヤプロジェクト  
新作影絵芝居  
『Ama』



影の色彩ワヤプロジェクト(石川県)

満月の夜、うら寂しい海岸にたどり着いた旅の男。  
男は顔も思い出せない自分の母親を探して彷徨っていた。  
そこに現れた海女は、男にその地方に  
伝わる昔話を聞かせるのだった。  
「昔のことでございます……」。

P新人賞2017最終選考上演会の目前には、昨年度の受賞団体・影の色彩ワヤプロジェクトによる新作影絵芝居『Ama』が公演されます。同作は能の演目『海人』に着想を得た、母と子の時空を超えた邂逅と鎮魂の物語。

インドネシアのワヤンという芸能は古くから魔除けや祖先の霊への祈りのために演じられてきました。今回は、人形遣いのシャーマンとしての性格を考察。現実と異界が混じり合うような幻想的世界を体験できる影絵劇に仕立てました。

2月4日(日) 14:00  
損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホール  
前売2,100円 当日2,400円

出演: アナント・ウィチャクソノ(影絵人形遣い)、月原豊、小川雅美  
演奏: Tidak Apa Apa、ナリモ  
脚本: 藤村美千穂、影の色彩ワヤプロジェクト  
美術: 岩井美佳 音楽: 西田有里 照明: 宮向隆  
音響: 清水聖一 映像: 岩井美佳、アナント・ウィチャクソノ  
衣装: 青木正子 舞台美術協力: 渡辺秀亮



2016年開催  
「創ろう!遊ぼう!パペットパーク」より  
「サファリパーク編」より

創ろう!遊ぼう!  
パペットパーク2  
〜すいぞくかん編〜

子どもだけで、もちろん親子でも、専門スタッフのアドバイスのもと、廃材を利用して、海の生き物を作ります。出来上がったら会場で遊んでみよう。一日ゆっくと、工作の時間、遊びの時間、親子のふれあいの時間をお楽しみください!

3月24日(土)・25日(日) 10:30~15:30  
損保ジャパン日本興亜人形劇場  
ひまわりホール  
対象: 幼児~ファミリー  
入場料: 1日600円(3歳以上一律)